

# 残雪の白山

【日程】 2016年5月4日～5日

【エリア】 白山

【形態】 ハイキング

【メンバー】 I田、S本、Y尾、I藤、K岡

【報告】 K岡

## 《ルート／タイム》

### 5月5日

別当出合（5：20）～甚之助避難小屋（7：35）～黒ボコ岩（9：00）～室堂（9：30/10：30）  
～黒ボコ岩（11：00）～避難小屋（11：40）～駐車場（13：40）

## 《報告》

今冬は降雪が少なかったことで、5月のゴールデンウィークに白山の登山基地、別当出合まで車で入れるとのこと。残雪期の白山はまたとないチャンスだ。連休は近場の白山へ、一泊二日の山行が即決した。



4日の初日は昼過ぎに木津川市を発つ。本日は別当出合の駐車場でテントを張り新緑の香りが漂うようなところで鉄板焼きの前夜祭をすることとなる。白峰温泉から牛首川沿いの林道を走る頃は、芽吹きだした落葉樹林帯の新緑が目にもぶしいほど鮮やかだ。山裾から上部へ、樹木の種類により、新緑が微妙に繊細な色を変えているさまは自然の摂理に感嘆せざるをえない。残雪の白山を望むビューポイントからの眺めは最高にきれいだ。明日の晴天の予報と相まって、あの頂上

を目指すのかところが躍る。

駐車場にテントを張り、その横でバーベキューセットを囲み宴会が始まる。餃子、てんぷら類、焼きそば、トマト、キャベツなどの新鮮野菜、泡盛、ビール、などなど。S本、I田氏の掛け合い漫談、冗句で場が最高に盛り上がる。宴も終盤になる頃小雨がばらつきだし、急いでテントに入りそのまま就寝となる。

フライをたたく雨脚を夢心地で聞きながら深い眠りにつく。

5日は晴天の予報だがテントを出ると山間が濃いガスに覆われている。雲の流れからかなり風が強いようだ。5時20に出発。気温は十数度か、寒さを感じない。今日は残雪がありピストンで下山する行程であることから最短の砂防新道をとることにする。

下の駐車場は前夜泊でテントを張る車が6台ぐらいだが、上の駐車場では多くの車が早朝からやってきている。



予想以上に沢山の登山者やスキーヤーで賑わっているのには少々驚きである。歩き始めは雪のない登山道だが、間もなく雪道となる。途中の中飯場で朝食をとる。甚之助避難小屋で4人はアイゼンを装着する。このあたりから上部は濃いガスに包まれて風もだんだん強くなっていく。緩斜面、急斜面のトラバースや直登を繰り返して、夏道のルートは何回かショートカットしながら高度を上げていく。濃いガス

で視界が段々悪くなっていく。しかし、トレースがあり竹の旗ポールが一定間隔に立っているためルートを探る恐れは少ないが不安がよぎる。踏みつける残雪の感触からすると温度はかなり高い

ようであるが強風で体感温度はマイナスだろう。いつもならトップを歩くことが少ないY尾さんが視界のない悪条件の中を順調な足取りでトップをどんどん進んでいく。それに後続が引っ張られる格好だ。



やがて目の前に室堂の大きな小屋がかすんで見えてきた。やっと室堂小屋に着いたのだ。小屋に入ると沢山の登山者が数台のストーブの周りで暖を取ったり食事をしたりしている。売店もオープンしている。しかし、小屋の外は吹き飛ばされるほどの強風が荒れ狂っている。わずかな登山者がさらに剣が峰の頂上を目指していたが、我々は今日の登山はここまでとしてゆっくり行動食を取り一時間休憩する。

わずかな登山者がさらに剣が峰の頂上を目指していたが、我々は今日の登山はここまでとしてゆっくり行動食を取り一時間休憩する。

寒さに敏感なS本氏は下山時の強風に対処するため七枚もの重ね着をするほど用意周到なのには感心する。

下山は特別なこともなく順調にすすむ。甚之助避難小屋で休憩をとりアイゼンを外し後は一気に駐車場に。振り返ると濃いガスが段々希薄になり上部に上がっていく。たぶん、山頂も間もなく晴れてくるだろうとの予想通り帰り道のビューポイントから望む白山は青空をバックにまぶしかった。最後に余談を二つ。

平均年齢 66 歳の老々男女の歩くスピードは往年のように速くない。後続に抜かれてばかりだ。後続者が追いついてくるたびに、快速です脇へ道をあけてと謙譲の美德を発揮。



かなりのお歳と思しきニッカボッカの老紳士が追いついてきた。「どうぞどうぞ」と脇へ寄る。「いいです、いいです」といいながら追い越していった。「もうすぐ 76 歳になるよ。耳が遠くなったが悪口だけはよく聞こえて困るんだなあ」と独り言を言っ

こんな天候に単独で登りに来られるのは三度の飯より山が好きなのかもしれない、どんな方なのだろうか。この 76 歳の青年のころはサムエルウルマンの「青春の詩」そのものではないかと、憧れみたいな感情が湧いてきた。

もう一つは、26歳の青年との邂逅である。甚之助小屋から少しいった斜面のトラバースを上がっていくとき青年が独り降りてきた。アイゼンも付けずごく軽装の服装だ。ザックも一般の登山者が使



わないようなカジュアルのもので縁のある帽子をかぶり寒さで鼻汁がでていた。眼があい挨拶を交わしたが、何故こんなに早く降りてきたのかと不思議に思う。しばらくして、メンバーの一人が所用で遅れてくるのを待つために暫く休んでいると、先ほど降りて行った青年がまた上がってきた。事情を聴くと、怖くなって一旦降りたが気を取り直して行けるところまで行こうと思ったとのこと。いろいろ話を聞いて、

我々と同行したいとのことであったので息子か孫のような青年と最後まで付き合うこととなった。手が凍えそうであるのに手袋もない。I藤さんが自分のスペア手袋を貸してあげたほどだ。I田氏はいろいろ冬山の装備や知識、危険なことなどレクチャーをしながら手を取り合うように歩き最後まで面倒をみていた。最後は一人一人に丁寧にお礼を言って富山へ帰っていった。何かすがすがしいものが心に残った山行だった。